



夕焼小焼（夕焼け小焼け）で 日が暮れて、山のお寺の鐘がなる



理事 中林 秀人

多くの方がご存知であろう童謡「夕焼小焼」。この詞のモデルになったと言われる寺院が本園の近くにあります。作詞をしたのは旧東京府南多摩郡恩方村（現八王子市上恩方町）出身の中村雨紅氏です。

八王子市の西のはずれ恩方地区。圏央道「八王子西インター」と言うと多くの方には分かりやすいかも知れません。インターを降りれば夏は緑が溢れ、たくさんの自然を求めて市内はもちろんのこと、品川や練馬等23区ナンバーの車も多く見られます。

「東京」と言うと私を含め、多くの方には大都会のイメージがあるのではないのでしょうか。インフラは整備され生活は便利で娯楽に溢れ、人々の様々な欲求を満たす街。あらゆる人を受け入れる懐の深さと多様なライフスタイルを実現すべく、多くの人が集まります。人が集まるということは＝就労人口の増加＝保育ニーズの増加＝保育所が必要＝保育士が必要・と、東京都が謳う保育サービスの象徴とも言える待機児童対策に力を注ぐのは、ある意味当然とも言えるかもしれません。

ここでその大都市東京をさらに細かく、我が町八王子市を見てみます。行政の施策とそれに歩調を合わせる地元の保育園協会、そして各施設の取り組みにより待機児童は減少し、本原稿の寄稿時では100人を切る模様。100人でも多いと言えば多いのですが、10年前の平成20年度は331人だったことや、入所申込児童数が当時より約1900人増加していることを考えれば、市・協会・各園のこれまでの取り組みの効果はあったと言えるでしょう。さらにその内訳を見れば八王子市は面積が広いゆえ地域差が大きく、本園周辺は郊外のこともあり近年は0～2人程が実情です。

また、昨今は「保育」と言うと待機児童がクローズアップされがちです。しかし、本件は全国的に見れば局地的課題とも言え、むしろ都内においても本園の所在地から見れば、人口減少と園児減少による定員割れの可能性に備え、認定こども園への移行等も検討すべきかもしれません。この定員割れへの対応は近隣の市町村共通の課題とも聞きますし、島しょ部でも同様かもしれません。ちなみにこれら詳細は全私保連広報誌「保育通信」に定期的に記事が掲載され、東京の西のはずれで庭に狸、少し奥に行けば猿が出る地に住む者として、毎回興味深く目を通しています。

他方、国の施策に目を向けると「子ども・子育て支援新制度」が施行され、この4月で4年目となりました。今日に至るまで保育の現場は処遇改善による待遇の向上は良しとしつつ、「社会福祉法人制度改革」等、様々な施策への対応の中、都内各地の保育所は子ども達の健やかな成長と保護者の育児支援のため、各々の立場で職務に取り組んできたことと思います。

このような中、民保協は加盟園が1000園を超えました。これは全国の保育所の2割以上を占めています。平成19年度の協会発足時が632園であったことや、その当時から保育士不足は言われていたものの、今年度は「TOKYO保育園フェア」を計5日間、且つ2000人も収容する東京国際フォーラムでも開催するとは、正に隔世の感もあります。これも時代の変化やニーズへの対応であり、今年度実施する「TOKYO保育フォトコンテスト」「TOKYO保育フォト展」を例に、今後もその時々に沿った事業を園業務と並行して行う担当の方への負担には留意しつつ、実施していく必要性を感じています。

大都会「東京」。一口に言うのは簡単ですが、深夜でも不夜城の如く煌々とライトが灯る地があれば、片や四方を山に囲まれ夕焼け小焼けが美しく、「昭和」のまま時が止まったような地もあります。都内各地で子育て支援の拠点となる保育所と、それに関わる子どもや保護者、そして保育所職員のためにどのような「路」を作るべきか…

平成30年度が始まるにあたり、民保協の「路」について考えてみました。